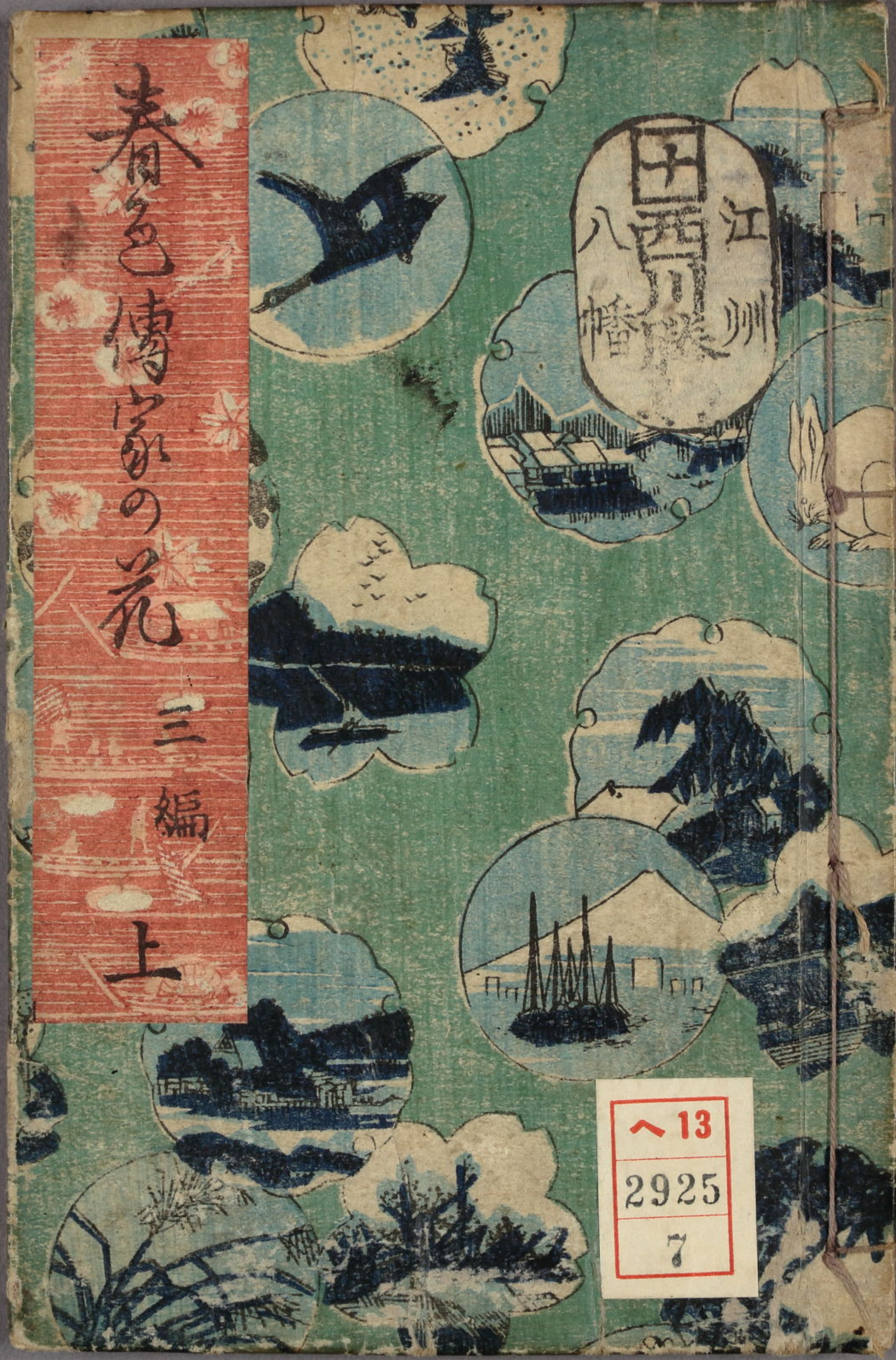
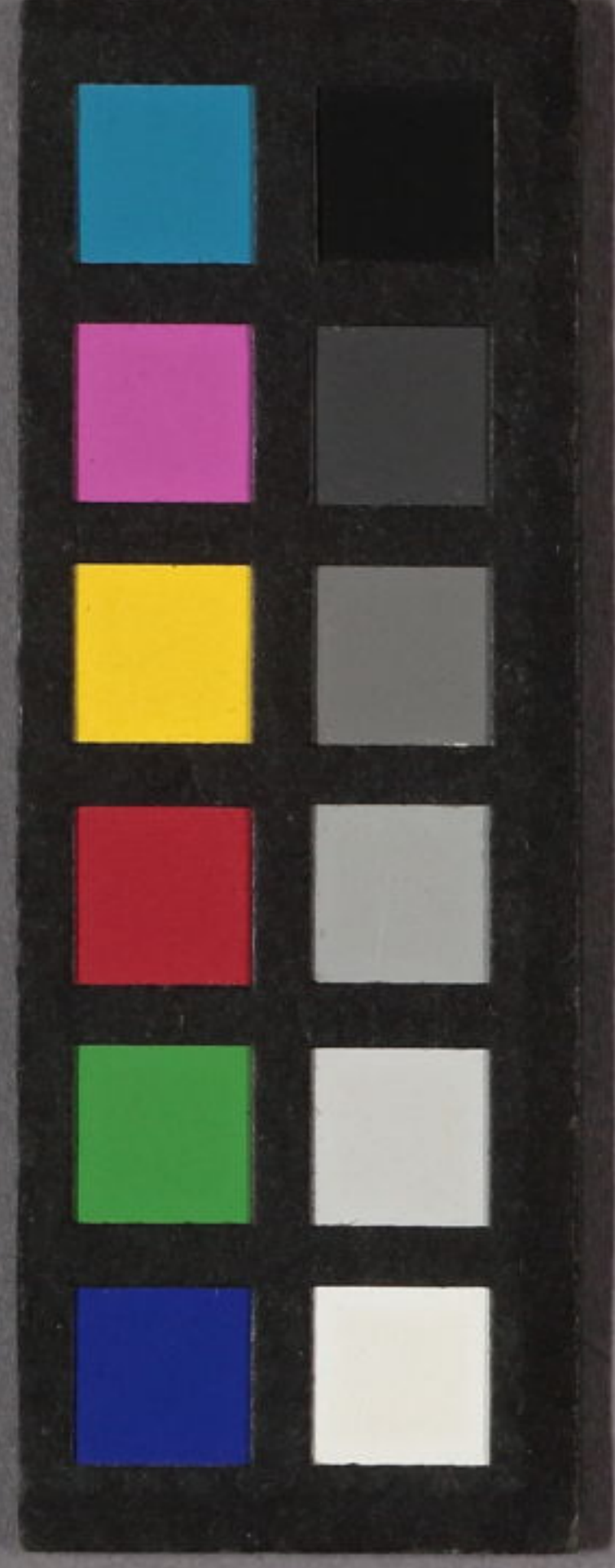




昭和九年
四月六日
購求

傳家むむ三編序

ハ文家の佳あるものや台義を定むるは

難き持て下りては、古道具たるやあはび

よのべとふたねあつ小説評史のあはび

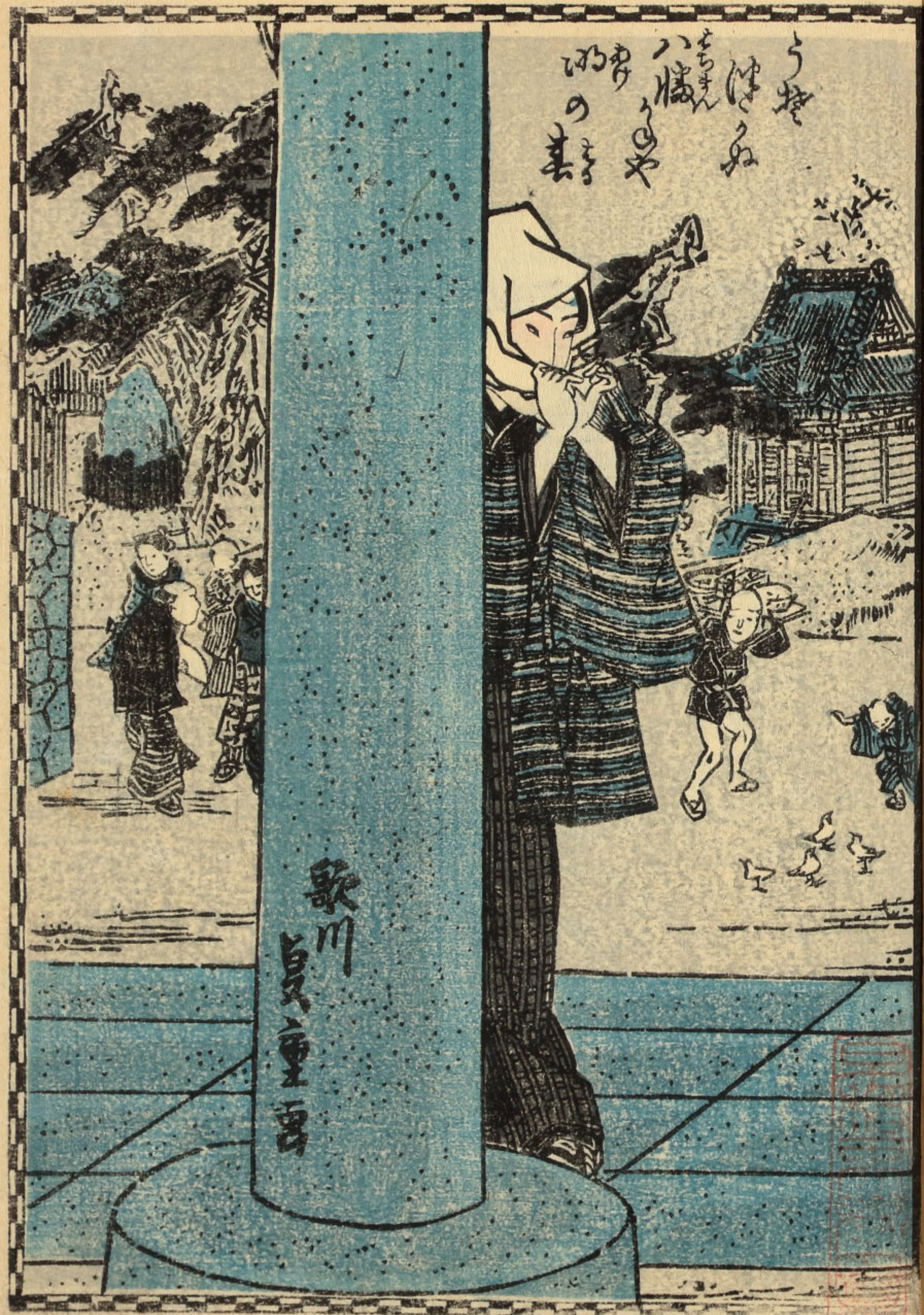
人ありて、其人を推して、明烏より二十

海軍同様に、中本流のせん、工生

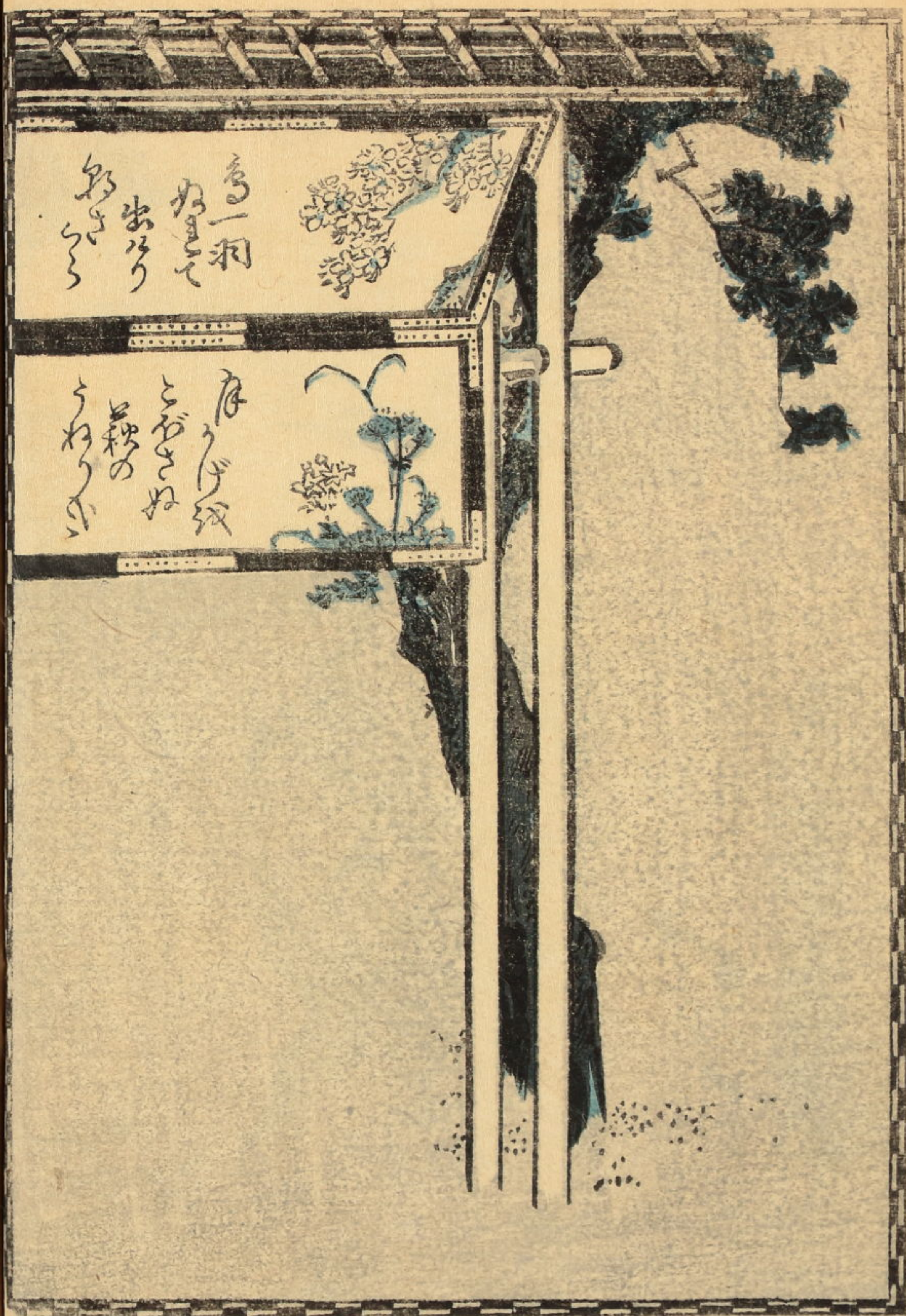
[illegible]

狂訓多矣 爲永春水誌









春色傳家の花巻之七

江戸 爲永春水著

第十三回

愛の玉吉が素生奴尋ねるに、鎌倉の大河を戦て東の方
 園の面々町々より所々最貧困母子あり、母は活業
 のも所々土人形を細工て娘もあまを見え、猫の形
 策の形、うんと七、八丈の頃、うへへ覚へ、寛ふら
 うの價、うんと母の活業の助と、初ね、ハカもせ、

近所の子供が誘ひに来ても十度は一度出でな
外面に揺る稀ふしと只ね々母親の側をたもて考
ねての教も同きで自然と親をたもてふさる度
哀さうくも電うけは玉へ母人さん昨日の横へ未
子より金もさへいねる衆のうへと人形を舟川
戸の同金へ持せりふ久 母へチニテ 能ヨと亦けりる様
途中で他所の子も騙るをりさへいふ 誰ぞを所の叔
母さんが後不彼土地の方へ移さううう主時同伴の

移ては玉へ玉へ夫とや今日に土がまひる 所ををいふ
まで三味線を教ふりても能久 母へ能くもさう又
か客さへでもお出の振るふお邪子めをりるをりさへいふ 現
ひて見せ然るる直ふお帰るヨ玉へイト返るも温順く
長家の奥の方へ移折る向ふの紫の戸を内より開き
て出る女 玉へお玉さん枕言ふお出今ねやお茶を
呼ぶ系所へ玉へ然久今日のお客さへいふの久
お新造さへお一人でお淋くそをた入る又故お茶を

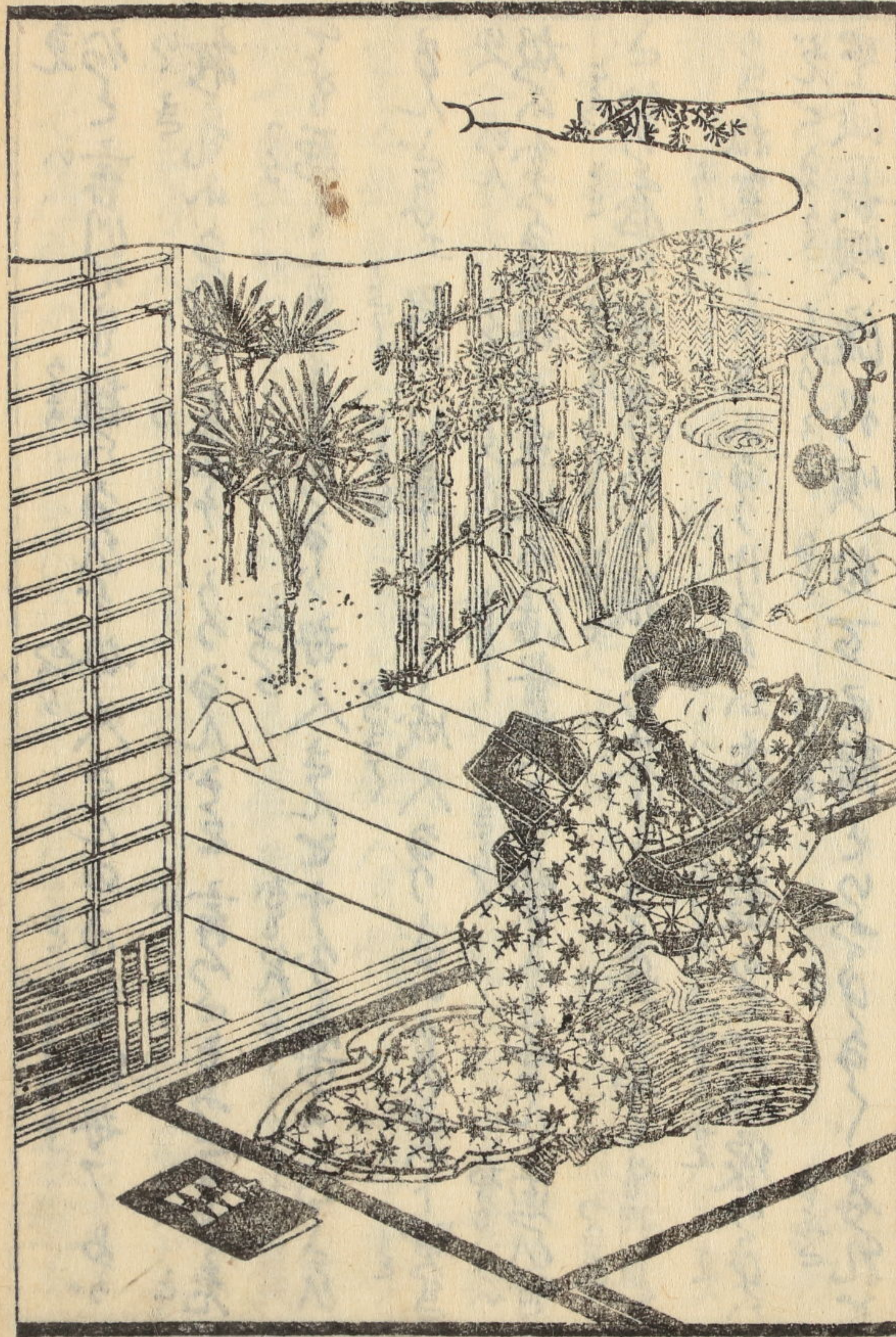
お近ぢかひまみまららふふとと思おもひひててササ玉たま有ありららふふトト言いふふがが紫むらの
戸とのうち内いへへ入いるる八や童えい頃ぎをを回まわりり庭ていのさ方かたへへいいららをを待まちつつねねて
お玉たま小こ声こゑををううけけるる年とし終しま二ふた十じ二ふた才さいのの美う人じんなりなりそのその名なを
お露ろとといいひひ人ひと品しやうよくよく公こうややららるるめめ目め下したをを憐あはれれむむ芳よしらら生うま
得う小こ児ごとと思おもははるるをを樂たのししくくととああけけるるががお玉たま今いま年とし十じ二ふた才さい
それそれどもども形かたち容よう入いれれたたががぐぐららふふををああままてて可う憐れんくく殊こと小こ孝かうなりなり
ああるる時ときもも同どう顔がんのの色いろ整ととのつつてていいくく登のぼ明めいるるままだだお露ろ八はち平へい
生な見み質しやうよよくくとと不ふ便べんををかかええくくががお玉たまももそのその思おもをを添そへへ保たもつつてて

親おやのの用もちひひをを思おもひひてて使つかひひててああるる時ときハハ毎まい度ど此こゝお露ろのの許もとへ
いいらら三さん味み線せんををとと教おしててままののお玉たまけけららええ末すえ物もの覺おぼええくく
ままるる用もちひひをを末すえ頼たのみみししくく思おもひひてていいらら

ままままだだお玉たまハハ貧ひんししききお玉たま育そだちちままれれどもどもお露ろとといいふふ
お玉たまののお玉たまののお玉たまのの三さん味み線せんををとと教おしててままののお玉たまけけららええ末すえ物もの覺おぼええくく
賞あやめめららるるのの覺おぼええへへいいららるるお玉たまがが身みをを助たすけけるるのの落お下くだ今いま
あありりとといいふふもも亦また更さらににお玉たまののお玉たまけけららええ末すえ物もの覺おぼええくく
世せののままままだだお玉たまのの覺おぼええへへいいららるるお玉たまがが身みをを助たすけけるるのの落お下くだ今いま

母^ハヤお玉^ハやけ放^ハはら^ハを^ハし^ハて居^カる^ハの^ハご^ハ何^ハ様^ハぞ^ハな^ハこの^ハ人^ハ
玉^ハハ玉^ハ母^ハも^ハ道^ハでも^ハあ^ハれ^ハ遠^ハき^ハん^ハの^ハ所^ハへ^ハ移^ハて^ハ呼^ハひ^ハて^ハ来^ハて^ハ
う^ハ涙^ハぐ^ハん^ハで^ハ居^カる^ハわ^ハや^ハあ^ハひ^ハる^ハ比^ハら^ハも^ハな^ハこの^ハご^ハう^ハ
玉^ハハ玉^ハ然^ハど^ハや^ハあ^ハり^ハま^ハせ^ハん^ハが^ハ西^ハ新^ハ壤^ハき^ハん^ハの^ハ所^ハへ^ハ来^ハる^ハ伯^ハ母^ハ
き^ハん^ハが^ハ私^ハの^ハの^ハを^ハ捨^ハて^ハま^ハう^ハと^ハ言^ハふ^ハと^ハ聞^ハこ^ハう^ハ悔^ハし^ハく^ハて^ハま^ハり^ハ
ま^ハせ^ハん^ハそ^ハう^ハて^ハ母^ハ人^ハの^ハの^ハを^ハ欲^ハが^ハ深^ハひ^ハく^ハ金^ハを^ハ老^ハて^ハ私^ハを^ハ
育^ハて^ハる^ハの^ハご^ハう^ハん^ハど^ハと^ハ言^ハふ^ハま^ハう^ハと^ハお^ハ霜^ハど^ハん^ハが^ハ私^ハの^ハ然^ハう^ハ言^ハ
ま^ハう^ハと^ハの^ハラ^ハえ^ハハ^ハ神^ハ明^ハき^ハぬ^ハの^ハ垣^ハ根^ハの^ハ隙^ハに^ハ捨^ハて^ハあ^ハる^ハと^ハ思^ハふ^ハ

う^ハ様^ハ多^ハの^ハ種^ハご^ハう^ハん^ハ食^ハの^ハ種^ハご^ハう^ハ知^ハま^ハう^ハテ^ハあ^ハる^ハひ^ハと^ハ思^ハふ^ハ
言^ハふ^ハ西^ハ新^ハ壤^ハき^ハぬ^ハふ^ハモ^ハア^ハお^ハ玉^ハの^ハ児^ハ女^ハと^ハバ^ハお^ハ母^ハが^ハ成^ハ
ま^ハう^ハな^ハト^ハ喜^ハ地^ハ思^ハふ^ハ言^ハふ^ハと^ハい^ハう^ハと^ハ悔^ハし^ハく^ハて^ハま^ハり^ハ
あ^ハひ^ハヨ^ハ母^ハハ^ハナ^ハハ^ハ何^ハと^ハ言^ハふ^ハと^ハそ^ハう^ハま^ハう^ハの^ハう^ハテ^ハあ^ハる^ハわ^ハど^ハ
ま^ハい^ハ捨^ハて^ハふ^ハ相^ハ違^ハう^ハけ^ハま^ハう^ハと^ハ実^ハの^ハ親^ハに^ハあ^ハる^ハ身^ハを^ハ
お^ハ人^ハと^ハい^ハう^ハま^ハう^ハハ^ハま^ハ時^ハに^ハ法^ハで^ハあ^ハる^ハと^ハ守^ハり^ハ袋^ハで^ハも^ハあ^ハ
ま^ハそ^ハあ^ハる^ハと^ハ他^ハ人^ハが^ハ何^ハと^ハ言^ハふ^ハと^ハも^ハは^ハ方^ハの^ハか^ハさ^ハが^ハ賤^ハく^ハ
あ^ハり^ハま^ハう^ハは^ハま^ハも^ハあ^ハる^ハと^ハい^ハう^ハの^ハハ^ハま^ハヨ^ハ玉^ハハ^ハナ^ハハ^ハ私^ハの^ハの^ハう^ハテ^ハ



借り集め着せてもか玉を連ね祝言を言はせる様よ世
話を乃けまばり先くの評判よく潮々ふ別後も増せ
程多く衣類の美態時々の衣服帯を外繕得保
具までも出来てゆく肩身が廣くすると思ふべし様
姫ごころの人もあまのりりか玉が仕合直り衣類が揃へ
容儀はいよく人の目につく潤いよ都て姫ごころも
出来て彼と譲る人多く或目お玉が教へ入て他行
帰る来りしが我より先へきては四人連資後より玉が

来るるをあらうつとて當りの個一おむめりふあ
かひもか玉の隣長を又ハ路次は長長の辺り住
居の女房娘ハアウは節ハ猫娘が又仕他見様で
歩りノリハ猫娘とる味の悪ハ何所の様
ハ猫が邪魔でも居るのうまへハアサ家おの悪ハ
女どろ土人形屋の娘よハアサ彼少女のりや猫
娘といふのハアサ彼少女ハを顔まで母人ふを侍
土の猫むろ細工で居アチハウ又猫娘といふの

可憐きあゝ、ハナシ、可憐きあるものがあるもの、近頃
肩を切て歩けり、面が憎く、何てさうなうた、い
ふ中、二ノウは、動もするを、か、座を、どう、か、客を、
言や、ぐ、て、衣服を、着、改、て、出、け、る、が、如、彼、女、を、俾、て
祝、美、を、さ、る、奴、に、何、程、な、馬、鹿、さ、ら、い、ハ、ナ、ア、二、そ、ま、い、世、居
と、一、七、座、一、ま、入、連、を、何、奴、が、玉、女、の、執、を、居、る、く、う、ど、ナ
ハ、そ、ま、い、い、い、で、藝、も、直、で、さ、る、く、う、と、お、座、を、入、出、る、も、わ、い
ん、ど、ハ、ア、ヤ、そ、ま、い、も、其、の、別、座、に、居、る、山、形、嬢、が、玉、女、の

と、教、へ、さ、る、く、う、陸、を、二、味、嬢、に、出、ま、る、く、う、ハ、二、味、
と、い、う、が、出、ま、る、く、う、の、彼、の、山、形、嬢、で、く、う、が、師、通、で、い、る、一、層、
些、さ、う、り、わ、い、い、三、味、嬢、ど、い、の、ラ、人、中、で、彈、る、の、の、ナ
ハ、お、ま、い、い、い、い、も、文、字、箱、さ、ん、が、お、ま、い、い、い、い、言、を、け、彼、の、山、形、嬢、に
さ、う、大、な、面、を、あ、て、居、る、が、彼、別、座、の、目、那、の、親、類、く、
あ、て、居、る、食、客、さ、う、の、ハ、食、客、に、三、味、嬢、が、不、意、用、に
お、ま、い、い、居、る、く、う、ハ、ア、ア、ア、ア、然、も、わ、る、ま、い、が、彼、の、山、形、
嬢、に、直、に、彈、る、く、う、の、ハ、ア、ア、ア、直、に、出、ま、る、く、う、の、人、が

おまゐるのさアナト 傍王まゐるふり候より同く歩
お玉がさ会如ふりけんあまき

第十四回

此夜も宵園を境末の町へ灯籠もはまきある校
弟後つらむ彼四人の調子みあうていざうお世話も
世間の姑と愉くらまする多矣連中資後みお玉が園
ぞともあうねづ候も樂しきらく笑つていざうお世話
ゆくエエサか園まけ常々や王女の母人が其身の

娘ハ隊むど社藝のか持て居やがるうら面が傍ひび
あひら・へん藝どころうら異なまど藝をお座敷でもとど
らふ白地貞実で清があの王女み三文もほめるものう
多くすても管色ハ道か美濃縣にやうひら安でも和
町より親習より好風な場所へ移て娘女流とも多て
着る垢脱がしてゆねあう全盛みあうさうふ・へん羽
折とて福まふ一の傍裁あもほるあう彼王女がぬ
るど苦しんごものても正負の藝者ふるさるもの

まこと 言のほどに善く人の癖一公の臣婦の同りよく如く
傍るものなり

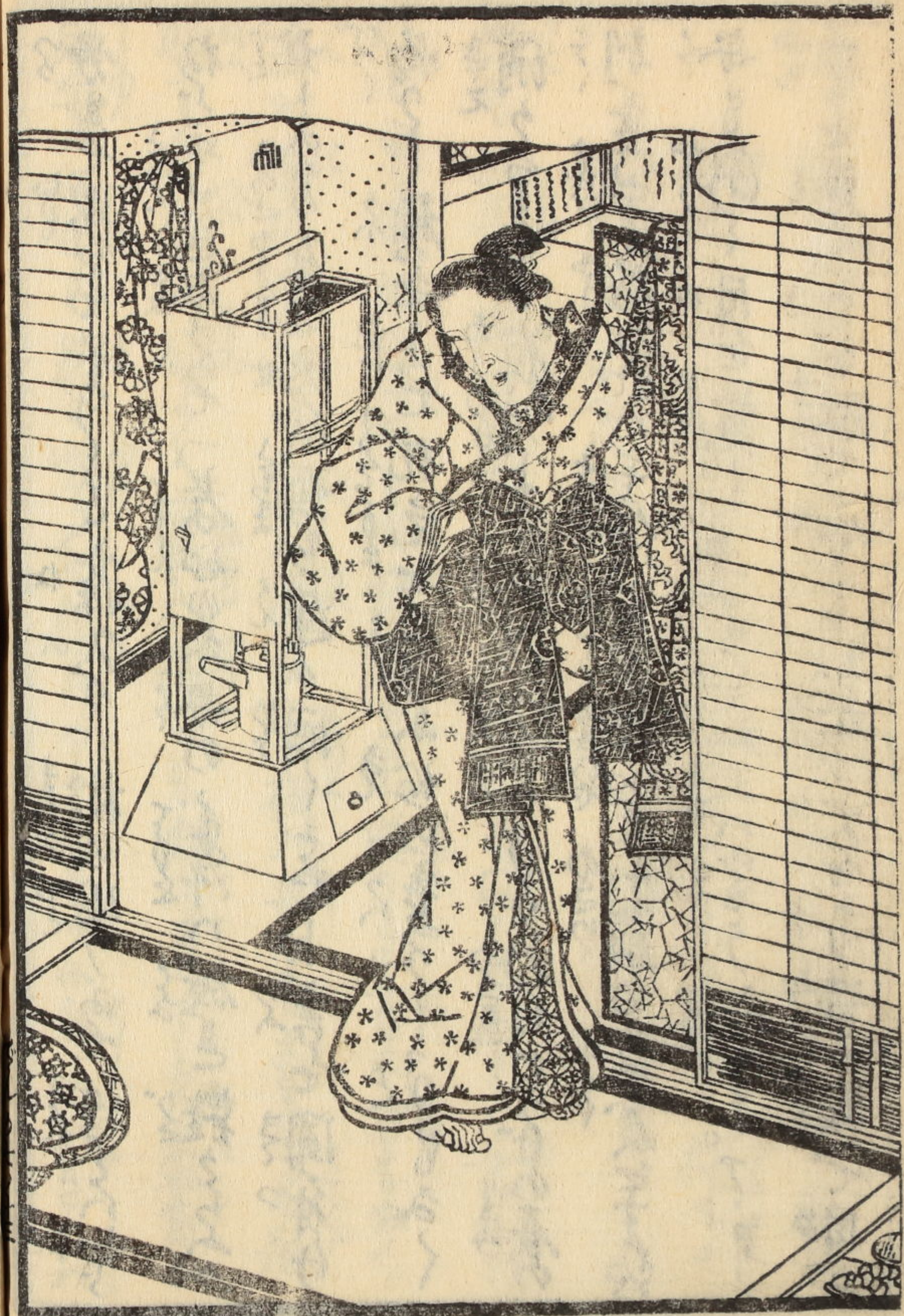
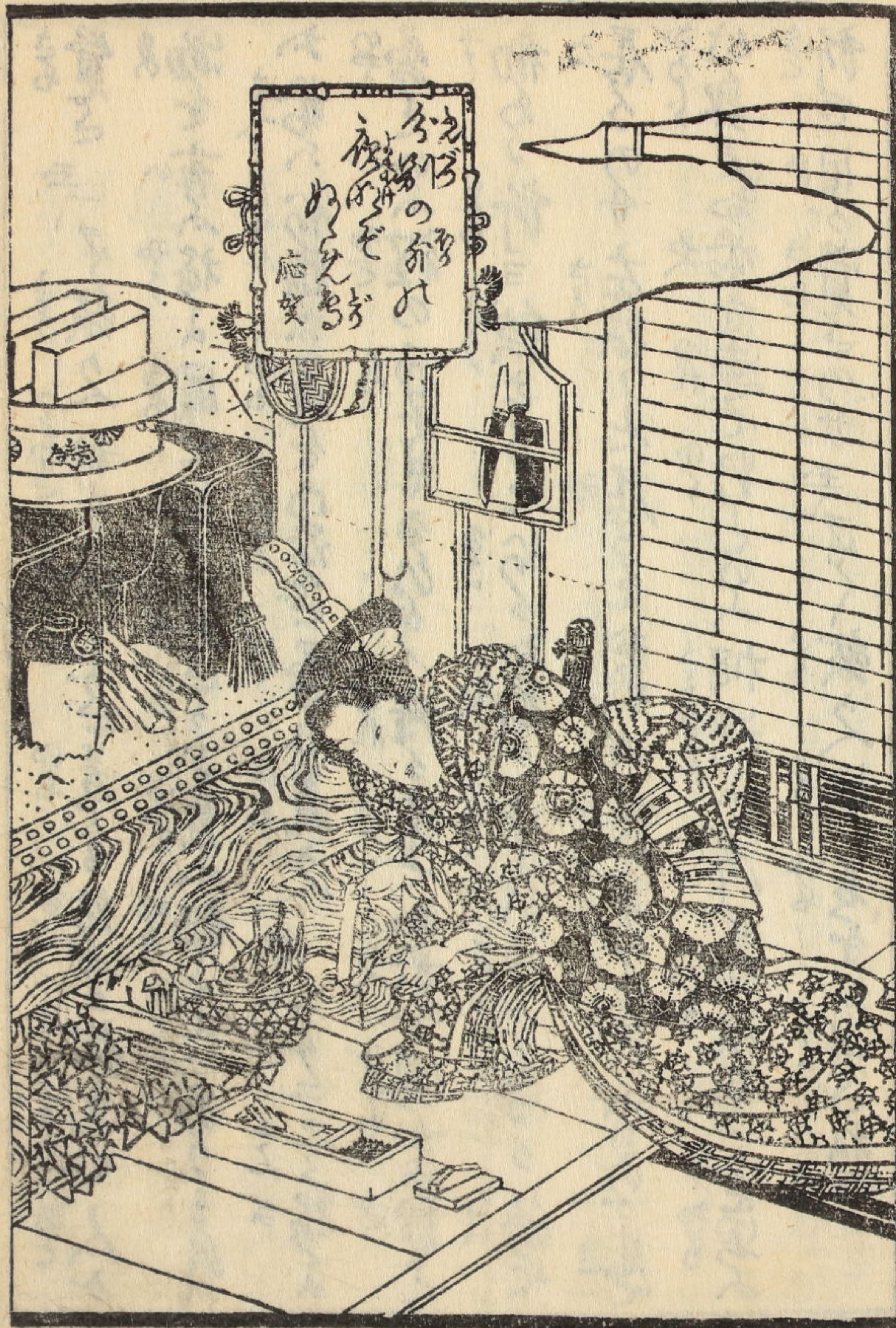
他人の風俗見て衣風俗を乃正と譲め言ひ
史を其方の禁めと一悪きを去て善きのみうつ
もの稀なり凡世の中の体を見るふそまへられど
下賤を評さるる男女とも己よりむも勝るを妬
顔のその美羅娘はまへ公を不具を見せし
觸るるその娘の親もが丹誠と衣類の見

苦一うづるをいふそまへ公を不具を見せし
活業でもさる格よけし其身の家業の跡
不及とぬる思ふ他人の僥倖を惜み譲り平
律儀の娘よても同輩の客色が宜しければ
罪を謝をけし譲る更甚し時評ある人
をむや顔のその見ゆとも公をうけまは
貴妃の小町姫も勝りて室の美人とおひへ
姿のその美羅とも公を賤し悪きまは畜生

おもひおもひとありしころと思ひまよふ顔もなほ
人かゝるく事ひらゝしころなりとも長く保ちて
目か度栄へるまきものぞう

借もお玉の途中あそぶ身の時をさあぐふゆゑ言れ
のそきも母のりまを傍らまを悔しき言ん方もな
齒を喰ひあひあて家小降りそ夜の母もあまをる居
眠ふ付すゆゆく寐入極ももるざうゝる老翁と
思案を格ら秋の明を待けるがさきふ年の初ざれば

芳まそ思ひまうくと寐入り枕の辺りあて寝るは
ねどそきあふあそ一孝心のあ母のふ洋の放し難うふか
お一の芳を公乃ひあち運が同くぞやト言を同かけ
物ゝ顔を上と枕元を見るふあのをあうゝりもみく
消うゝる有明より戸の透るのりお目のうづの辰の
刻をうゝ移さればま修直ふ起きてお版のまを度すれが
母もあゝ目を覚一あやあ玉の寝る起ま。アア
夢を見そをを脳で居るああが火をす青が同へて目



覚^さと^と 玉^{たま}ハ 然^{しか}久^く 恥^はも 今^{いま} 一^{ひと} 二^{ふた} 三^{さん} 四^よ 五^ご 六^{ろく} 七^{しち} 八^{はち} 九^く 十^{じゅう} 十一^{じゅういち} 十二^{じゅうに} 十三^{じゅうさん} 十四^{じゅうよ} 十五^{じゅうご} 十六^{じゅうろく} 十七^{じゅうしち} 十八^{じゅうはち} 十九^{じゅうく} 二十^{じゅうに} 二十一^{じゅうさん} 二十二^{じゅうよ} 二十三^{じゅうご} 二十四^{じゅうろく} 二十五^{じゅうしち} 二十六^{じゅうはち} 二十七^{じゅうく} 二十八^{じゅうに} 二十九^{じゅうさん} 三十^{じゅうよ} 三十一^{じゅうご} 三十二^{じゅうろく} 三十三^{じゅうしち} 三十四^{じゅうはち} 三十五^{じゅうく} 三十六^{じゅうに} 三十七^{じゅうさん} 三十八^{じゅうよ} 三十九^{じゅうご} 四十^{じゅうろく} 四十一^{じゅうしち} 四十二^{じゅうはち} 四十三^{じゅうく} 四十四^{じゅうに} 四十五^{じゅうさん} 四十六^{じゅうよ} 四十七^{じゅうご} 四十八^{じゅうろく} 四十九^{じゅうしち} 五十^{じゅうはち} 五十一^{じゅうく} 五十二^{じゅうに} 五十三^{じゅうさん} 五十四^{じゅうよ} 五十五^{じゅうご} 五十六^{じゅうろく} 五十七^{じゅうしち} 五十八^{じゅうはち} 五十九^{じゅうく} 六十^{じゅうに} 六十一^{じゅうさん} 六十二^{じゅうよ} 六十三^{じゅうご} 六十四^{じゅうろく} 六十五^{じゅうしち} 六十六^{じゅうはち} 六十七^{じゅうく} 六十八^{じゅうに} 六十九^{じゅうさん} 七十^{じゅうよ} 七十一^{じゅうご} 七十二^{じゅうろく} 七十三^{じゅうしち} 七十四^{じゅうはち} 七十五^{じゅうく} 七十六^{じゅうに} 七十七^{じゅうさん} 七十八^{じゅうよ} 七十九^{じゅうご} 八十^{じゅうろく} 八十一^{じゅうしち} 八十二^{じゅうはち} 八十三^{じゅうく} 八十四^{じゅうに} 八十五^{じゅうさん} 八十六^{じゅうよ} 八十七^{じゅうご} 八十八^{じゅうろく} 八十九^{じゅうしち} 九十^{じゅうはち} 九十一^{じゅうく} 九十二^{じゅうに} 九十三^{じゅうさん} 九十四^{じゅうよ} 九十五^{じゅうご} 九十六^{じゅうろく} 九十七^{じゅうしち} 九十八^{じゅうはち} 九十九^{じゅうく} 一百^{ひゃく}

元 上よりお玉へ肥秋の情をききて哀初として今ね
 死際より枕えりて言まじく人を待り他人の傍りも口
 惜しけりて一度のまねも愛者ともなりて近藤
 人との顔を見えりて尋ねるお露もさても悪く言
 たるやうの鼻をひきき第一母親を安樂
 養ひ度と只向ふ宿舎にき日の昼に肥秋の
 連中めて一人お玉を愛する様は言へぬとて
 義が来りて委しく金所の者の傍り言をきて後

おたのまが時多き夫と云い料理やの定入公易く
出入しと養のあつ娘を抱へ不便を加へ養ふより
おまふ公年如世のなるふき家へ来る格と勸められ
母親も相成を遂そ一年余の母を養ふ程の
當の金を備へ年々も種く時多き夫の家へ
養ふふきとせしめしなり

昔漢土宋の代に紀氏の人あり五月八日辰生れしを
忌め給ひて野屋へ捨たり
同村の住人

趙氏の女房が拾ひよそ育ふ七七八の頃ふりて実
の親達を折糸ありてふきふ向ひて汝ハ我よりと家
度も言ひしゆへふき遠を往母のきて國に趙氏の女房
おも陽きと始終の介解といひ養せけむと候と流し
これと聞けるが實の親の方も往母の方も養ふより
けむとふき紀遠といふ名ありし十二三歳の弟より他
人の傭い進て養ふ候と云う二三人を實の母を送り三
二と養ひの母ふよへて何れも養ふより考ねをきけり

り
家よりおどせしやまねども 昨日暴風 我身へ死しるが
趙氏の母子が慈悲深きと考ふるの候ては身今も
延と紀邁ふ活返さるるより早くそのを告ぐと神祇
の教ふ依て之まで参りしといふを思へば爰覺る母
子とも不思儀あるものと思ひ周章て衛氏の方へ移て
見置る娘へ死して家早棺の中へ納めたり 既小寺へ
送りんとするを止め爰のつとを告て棺をひききき
娘の息を吹返して獲生し 久観し事も無遠を侘て

紀邁と夫婦ふせしが 母子夫婦膝まゝく 長命の縁
小福人となり 栄へしをばは実縁を思ひあつせを孝の
徳あるのつとを尊と別て 後親めを孝のつとを尽し玉へり

春色傳家の花巻之七

